

經濟論叢

第七十四卷 第五號

- レーニンの市場理論について……………田 中 眞 晴 (1)
- 封建地代とブルジョアの發展……………山 田 浩 之 (19)
- 攝河棉作地帯における農民の動向……………脇 田 修 (35)
- 阿波藩における葉藍專賣制度の成立過程…大 槻 弘 (58)
- マルクスの「經濟學批判體系」と
レーニンの「帝國主義論」……………吉 信 齋 (80)
- 最高入先出法の批判的考察……………高 寺 貞 男 (97)
-

[昭和二十九年十一月]

京都大學經濟學會

レーニンの市場理論について

田 中 眞 晴

一 わたくしは、マルクス主義經濟學の發展史という視角から、レーニンの市場理論をとりあげようと思う。このためには、あらかじめ、「レーニンによるマルクス主義經濟學の發展」ということの方法論的な性格を概括しておくのが適當であらう。

マルクスがマルクス主義の基礎を築いたのは、西歐の先進資本主義諸國において資本主義が確立し、社會の一切の諸關係が資本という「特殊なエーテル」に浸され、染めあげられた時代であつた。マルクスは、ブルジョワ社會の止揚による全人類の解放の道を探求し、唯物史觀と經濟學によつて——あるいは唯物史觀を基礎とする經濟學によつて——、プロレタリアートの立場を歴史の運動に相即的なものとして確立した。マルクスの課題は、歴史に對するあたらしい見方をつくりだし、それを基礎として、初期社會主義とブルジョワ經濟學とに對して、兩面批判をおこない、社會主義を科學と結ぶことであつた。そしていうまでもなく、マルクスの生涯の理論的成果が『資本論』である。『資本論』の主眼は、ブルジョワ社會の經濟的運動法則の解明——ブルジョワ社會の搾取構造をあきらか

にし、この搾取體制がその再生産過程自體のなから自己自身を否定する諸條件を累積的に産みだし、より高次の社會體制へと止揚されてゆくプロセスを理論的に追求することである。このために、『資本論』の編別は「經濟學的諸範疇が近代ブルジョワ社會において相互にもつ關係」(『經濟學批判序説』マル・エン選集補巻3、二八七頁)によつて規定せられてゐる。そして、資本主義の諸法則は、「過程の純粹な経過を保證するような諸條件」(『資本論』第一部、アドラッキエー版六頁)のもとでたしかめられねばならない。このことは「資本主義の生産様式の内部組織だけをいけばその理想的平均において敘述する」(同、第三部八八七頁)という『資本論』の主目的によつて必然化されてゐる。『資本論』は、第一部二四章・第三部二〇章・三六章・四七章などにおいて資本主義の歴史的成立と資本制以前への省察をおこなつてゐるが、『資本論』の中心は、價值—剩餘價值法則を基礎とする再生産論(主峯—第一部第七篇・第二部第三篇・第三部第三篇)に、すなわち資本の確立以後その没落への過程の理論的究明にある。ところで、『資本論』はその内部においても十分には仕上げられていない點があるし、またあえて「經濟學批判のプラン」をひきあいにしなくては、『資本論』とブルジョワ社會の現實的運動とのあいだに間隙が残されてゐることは、あきらかである。『資本論』の方法論にたつて『資本論』の續形成をはかること、いいかえれば『資本論』の上部構造を展開することは、たしかに、『資本論』から現實への一つの道だといつてよい。このような仕事の方法的性質は、『經濟學批判序説』に書かれてゐる意味での「上向」であろう。いいかえると、次第に複雑な諸契機を理論展開のなかに織りこんでゆき、價值—剩餘價值法則のブルジョワ的世界におけるより具體的なあらわれを追求し、ブルジョワ的世界をば、「多くの諸規定の總括」として再現することが、この仕事の内容となるであろう。したがつて、このような展開が假におこなわれたとして、そこに再現される「現實」は、あくまで資本主義一般ある

いは型としての資本主義であつて、時間的・空間的にさまざまの様相をもつ各國の資本主義ではない。

レーニンによるマルクス主義經濟學の發展は、右のような意味での『資本論』の續形成ではなかつた。レーニンはもつと端的な仕方て『資本論』から現實への道をきりひらいた。レーニンは、『資本論』において、未展開な部分が存在するにもかかわらず、ブルジョワ社會の內的構造解明の學としての經濟學が本質的には完成したと考へ、マルクスの理論的遺産を踏まえて、變革のための實踐に出立した。レーニンにおける經濟學的認識の目標は、もはやマルクスにおいてのように資本主義一般ではなく、より具體的・直接的なものである。それは、あるいはロシア資本主義の分析であり、あるいは「帝國主義の基本的な經濟的諸特質の關連と相互關係」の究明（『帝國主義論』、レーニン二卷選集⑥六九頁）である。そして、それらはすべて、レーニンが當面した戰略的諸課題の解決行にふかく結びついている。レーニンにおいては、なにを對象とし、どこに分析の焦點をおくかが、それぞれの段階における課題と密接に結びついている。それゆへ、レーニンによるマルクス主義經濟學の發展とは、レーニンが、マルクスとは異つた場で、マルクスの理論的遺産を繼承して、しかし、マルクスが生涯の課題とした經濟學とはちがつた認識目標をもつ經濟學的認識を展開したことであると、一般的に規定してよいであらう。マルクスを基準としてみると、それは、『資本論』の續形成ではなく、適用であり、レーニンを基準としてみると、『資本論』の諸理論の動員による、あたらしい經濟的現實の把握である。

さて、以上的一般論を當面の課題たる市場理論の研究方法にひきあてて考えてみると、市場理論をマルクス主義經濟學の發展としてとらへ、レーニンの仕事の本質をあきらかにすべき研究視角は、市場理論を『資本論』と同一の方法論的平面にあるものとして見ることはない、ということが出てくる。たとえば、マルクスは市場について

どれだけのことをあきらかにし、レーニンはそれに何を加えたかというように、狹義の理論史の視角からレーニンの市場理論をみるばあいには、おそらくレーニンの仕事の内容はマルクスに還元されてしまい、レーニンの業績は、市場理論展開の過程でかれが作成した構成高度化表式とか、恐慌論の深化とかにせざるであらう。勿論、これらの意義は重要である。だが、そうした仕事を、レーニンは、それ自體として獨立な課題として果したのではなく、いつそう大きな仕事の、理論的基礎作業の一環として果したのである。この、いつそう大きな仕事というのは一八九〇年代におけるロシア資本主義分析であり、そのための理論的基礎作業が市場理論であり、構成高度化表式や恐慌論は市場理論の一環として展開せられた。したがつて、レーニンの市場理論の意義をただしく評價するためには、狹義の理論史的な視角からではなく、一八九〇年代におけるロシア資本主義分析の理論として把握しなければならぬ。

(1) 經濟學は一般に、實踐的な課題への對決において展開されるものであるけれども、ここにいるのは、それよりも一步すすんだ意味においてである。『資本論』の實踐的性格を疑う人はないであろうが、『資本論』の認識目標や構造は戰略段階の推移によつて變更されたりはしない。けだし、『資本論』は、いちいちの戰略的諸課題の具體的な解決を直接の目標とするものではなく、一切の戰略的諸問題の解決のための一般的基底となるような、基礎理論の展開（「ブルジョワ社會の經濟學的解剖」）をめざしているからである。これに反して、レーニンのばあいには、經濟學的勞作の認識目標が戰略的問題に直結している。

二

『資本論』から資本主義分析へ、これが市場理論把握の基礎視點であるが、ここで注意すべき第一の點は、『資

本論」と資本主義分析との方法的なちがいが、第二點は、『資本論』に前提されている實在と資本主義分析がかかわるところの實在とのちがいである。ところで、『資本論』を全體としてみると、資本主義以前および資本主義成立過程への省察の諸章をふくんでいるが、ここで、『資本論』という言葉は、それらの諸章を省いて、價值再生産論の展開を軸とするところの『資本論』の主體をさしている。したがつて、以下、まぎらわしいばあいには、再生産論という用語におきかえよう。勿論、ここにいう再生産論とは、第二卷三篇の再生産表式（『實現の理論』）だけをいうのではなく、『過程の純粹な経過を保證するような諸條件』を前提して展開されているところの資本主義的諸法則の總體——總括の意味である。

さて、第一の點について。ブルジョワ社會の內的構造の解明を目的とする經濟學的認識は、「直觀と表象との概念への加工」であり、「主體が、社會が、前提としてつねに表象にうかべられ」ながら形成され、その結果として理論的に再生産されるところのものは、出發點であつたところの主體——ブルジョワ社會に他ならないといへ、かくして理論的に再生産されたブルジョワ社會は、イギリスとかフランスとかの資本主義ではなく、型としてのブルジョワ社會あるいは資本主義という型である。たしかに、『資本論』とくにその第一卷は、たとえば相對的剩餘價値の生産に關する章や資本制的蓄積の一般的法則の展開にさいしてみられるように、當時のイギリスの現實が提供する資料を駆使しているが、勿論、『資本論』はイギリス資本主義分析ではない。『資本論』と具體的な實在としてのイギリス資本主義との關係については、『資本論』第一版序言のつぎの言葉が参照されるべきである。すなわち、「わたたくしがこの著作で研究しなければならぬものは、資本制的生産様式、および、これに對應する生産——ならびに交易諸關係である。それらの行われている典型的な場所は、今日までではイギリスである。これ、イギリス

が、わたくしの理論的展開の主要な例證として役立つ所以である」(アドラッキー版七頁、傍點は筆者)と。これに反して、もし、一八六〇年代のイギリス資本主義分析をおこなうとすれば、イギリスの經濟的實在そのものの構造的把握が認識目標となり、『資本論』においてのように、理論的展開の例證として實在が織りこまれはしない。逆に、イギリスの實在を把握するために、再生産論が動員せられねばならぬだろう。それとともに、イギリス資本主義分析は、再生産論を基礎とし、中核とするとはいえ、ブルジョワ社會の内的構造の解剖學のそとに置かれた實在の諸側面、たとえば、外國貿易とか權力の問題とかが、資本主義分析の課題の在り方によつて、多かれすくなかれ、分析の對象とならざるをえないであらう。

ところで、第二に、一八六〇年代のイギリス資本主義分析は、右に述べたように、再生産論だけでできるわけではないけれども、すくなくとも、その基本的な經濟構造を把握するうえで、再生産論のほかになんらかの媒介環を必要としない。なぜなら、一八六〇年代のイギリスはブルジョワ社會の型に近似値的な實在性をもつており、資本主義的諸法則の作用をさまざまげような諸要因は、全機構的視野からすれば些細なウエイトしかしめなかつたと考えられるからである。これに反して、資本主義分析の對象が、一八六〇年代のイギリスなどではなくて、たとえば、レーニンが當面した一九世紀末のロシアのばあいとなると、事情がちがつてくる。ここでは、社會の構造そのものが、再生産論で前提されているそれとは質的に異なるものをもつてゐるから、その分析に再生産論を無媒介に適用することはできない。ごく大ざつぱらにいつて、一八九〇年代のロシアでは、一方に機械制大工業が存在していたけれども、農奴制的遺制が上部構造だけではなく生産關係においても廣汎に残つており(たとえば分與地的土地所有)、全機構的にみれば、資本が全生産部門を把握しつくす以前の狀態であつた。しかも、當時、資本主義世界

は、すてに帝國主義段階への推轉の過程にあり、レーニンは、かかる世界史的環境のもとで、資本の成立過程を中心とする資本主義分析をおこなわねばならなかつたのである。結論からさきにいえば、市場理論は、『資本論』から資本主義分析へという認識目標の轉換と、さらに、その資本主義分析の對象が一八九〇年代のロシアであるという實在の面との、二重の規定によつて要請せられたところの、資本の成立過程を中心とする、資本主義の歴史的發展に關する理論である。市場理論の本質はかかるものとして把握されねばならない。

ところで、周知のとおり、レーニンが市場理論を展開したのは、いわゆる市場問題論争を契機としてであつた。レーニンの市場理論はナロードニキに對する批判であるとともにレーニン自身によるロシア資本主義分析の基礎理論である。とすれば、そのような結びつきはいかなる事情によるのであらうか。われわれは、當時のレーニンの實踐的課題に即して、資本主義分析とナロードニキ批判と市場理論とのかわり方を見定めておく必要がある。

一體、資本主義分析そのものは、ナロードニキが存在すると否にかかわらず、變革のための理論的基礎作業として必要であつたといわねばならない。けだし、一國における諸階級の對抗關係を、諸階級の經濟的存在條件たる生産諸關係の具體的な編成の分析にまで降りたつて、把握し、將來におけるその發展の仕方を客觀的につかむことによつてのみ、變革における敵・味方の勢力配置がわかり、變革の對象たるべき諸範疇（革命の性格）が規定せられうるからである。したがつて、レーニンがブレハノフらによつておこなわれたマルクス主義理論の普及（インテリゲンチヤのあいだでの）のための活動のあとをうけて、マルクス主義を、ロシアの労働者運動のなかにもちこみ、實踐的に確立すべく出立したとき、そのことは同時に、ロシア資本主義の分析をマルクス主義的インテリゲンチヤの理論的任務として措定することをふくんでいたといわねばならない。そして、いうまでもなく、資本主義分

析は嚴密に客觀的であることによつてのみ、實踐に奉仕できる。だが、資本主義分析の客觀性とは、寫眞のような平面的な實在模寫であることはできないし、また、そうであつてはならない性質のものである。分析の焦點や對象の限度は、それぞれの場における課題の在り方によつて規定せられるであらう。ナロードニキ批判と資本主義分析との接點はここからでてくる。すなわち、當時、ナロードニキの思想はすでにプレハノフの批判によつて理論的脆弱性を暴露されていたとはいへ、いまなお強い影響力をもつており、それがマルクス主義の確立をはばむ大きな障壁をなしていたことは、レーニンがナロードニキとの鬭争のために「合法的マルクス主義者」と「一時的提携」を結ばねばならなかつたことにみられるとおりである。ナロードニキは、かれらの「理論」と「實證」との一切を、ロシア資本主義の夭折の結論へと集中し、プロレタリアートが社會變革の主體であることを否定していた。かくて、レーニンは、マルクス主義の確立という基礎的課題そのものから、ナロードニキに對抗して、ロシアにおいて資本主義は發展しており今後も發展すること、資本主義の發展のなから累積的に産みだされるプロレタリアートこそが社會變革の主體であることの證明に力をそそがねばならなかつたのである。一八九三—一九九年のレーニンの諸勞作は、この基調につらぬかれており、『ロシアにおける資本主義の發展』（一八九七—一九九年）は、この、市場理論段階とも名づけらるべき時期の總括とみてよいであらう。このことは、『發展』から『農業綱領』への發展變化を把握するうえで、また、われわれがレーニンを攝取するうえで、注意すべき重要な點だと思われるのであるが、それはともかくとして、割りきつたい方をする、市場理論は、資本主義は發展することをしめすため、理論であり、市場理論が、ナロードニキ理論の批判であるとともにレーニン自身による資本主義分析の基礎理論でありえたのは、右のような關連によるのである。

以上、わたくしは、第一に、『資本論』から資本主義分析へという認識目標の轉換と、典型的資本主義社會ではない一八九〇年代のロシアを對象とするという二重の規定から市場理論が要請せられることを指摘し、第二に、市場理論をレーニンに對應して理解した。兩者は關連するものではあるが、第一の視角からは、市場理論の理論的性質が問題となり、それに關するかぎりにおいて、ロシアの實在との關連があらわれてくるのに對して、第二の視角からは、市場理論の理論的性質の問題は後景にしりぞき、市場理論とロシアの實在分析とのいつそう具體的な關連が問題となる。次節のテーマは市場理論の内容にたちることによつて、第一の視角から問題を具體化することである。

(1) 一八六一年の農奴解放以後、農民に割りあてられた土地。分與地は農村共同體の所有とされ、定期的に割りかえが行われたために、農民はそれを賣ることを法律で禁止せられていた。

(2) レーニンは、『人民の友とはなにか』（一八九四年）のなかで、「生産關係の一定の制度としてのわが國の現實についての完備な繪圖をえがく」ことの必要を説き、「ロシアの歴史と現實についての詳細な研究に立脚することの理論は、プロレタリアートの要請にこたえなければならぬ」（レーニン全集、邦譯第一卷三一四頁）と述べている。

(3) いうまでもなく、課題が認識とは獨立的に存在して認識の方向をきめるといふような一方的な關係のものではない。兩者の關係は、課題—問題意識によつて認識の方向が規定せられるとともに、第一次的には實在の在り方によつて課題の在り方が規定せられ、認識が深まるとともに課題自體が具體的な規定性を獲得するという、相互媒介的なものである。

(4) レーニンは合法的マルクス主義との一時的提携をおこなつたが、もちろん、それはマルクス主義と「合法的マルクス主義」—ブルジョワ的合理主義との峻別をおこなつたうえにおいてである。『ナロードニキ主義の經濟學的内容とストルーヴェ氏の著者におけるその批判』（一八九四—五年）における唯物論と客觀主義との興味ぶかい對比を参照（全集第一卷、四三一頁以下、五三八頁）。レーニンは一八九五年、ペテルブルグ工場労働者の斗争を指導し、そのためにシベリヤに流刑されるが、かれの流刑中

に、マルクス主義の内部に「經濟主義」（『ロシア版ベルンシュタイン主義』の動きがはじまり、レーニンは統一的なマルクス主義黨の結成のために、かれらとの闘争に力をそそぎ、合法的マルクス主義者とも絶縁するにいたるが、このころには、ナロードニキはすでに克服され、マルクス主義確立のための障害ではなくなつていた。レーニンが、ナロードニキから、マルクス主義内部における非マルクス主義的要素の排除に、批判の主眼を移す旋回點は、レーニンの著作についてみるかぎり、一八九九年である。

(5) レーニンは、究極の目的が社會主義革命であることとともに、當面の目標がブルジョワ民主主義的自由の獲得であることを、この時期においても、ハッキリ述べている。（『社會民主黨綱領草案と解説』全集第二卷七八頁）をして、當面の目標の達成のためには、急進民主主義者と提携すべきことを説き、ナロードニキのなかに反絶對主義的——民主主義的要素を認めそれを評價している。（全集第一卷三〇四、五四二—四、第二卷三二三、三二八、三三九頁以下を参照）。だから、レーニンが市場理論段階ではナロードニキの反動性のみをみており第一ロシア革命の過程ではじめてナロードニキを再評價したというのは當らない。だが、市場理論段階では、當面の目標を農民革命としてのブルジョワ革命としては考へていず、したがつて農民革命のイデオロギーとしてナロードニキ思想を評價することはなかつたし、勞農提携によるあたらしいブルジョウ革命の理論はまだうまれていなかった。

三

從來の慣用によると、レーニンの市場理論という言葉は、せまい意味では、市場形成理論（市場理論表式）のみを指し、ひろい意味では、實現理論および外國市場理論をふくめた全體（『發展』第一章に要約されている理論）を指すが、レーニンの理論を『資本論』から資本主義分析へという視角から考察するばあい、勿論、中心をなすのは、市場理論表式であり、前節で、レーニンの市場理論という言葉を使つたさいに意味してゐたのもこれである。

ただし、以下の行論があまりかにするように、それを全體（廣義の市場理論）との連關においてとらえることが大切である。

市場理論表式は周知のように、資本主義の成立過程における市場形成をば、鳥瞰的な圖式としてあきらかにするものであるが、それについて注意すべきは、現物經濟↓商品經濟↓資本主義という、市場理論表式の措定する歴史發展のシェーマである。このシェーマは、市場理論表式の論理自體にふくまれてゐるものである。すなわち、市場理論表式においてレーニンがしめそうとしたのは、市場を商品經濟の範疇としてとらえ、社會的分業（各經濟單位相互間のあいだの生産的勞働の特殊化・専門化）が進展するにつれて、またその進展の程度に應じてのみ、生産物の商品への轉化がおこなわれること、そして、生産物が商品に轉化するにつれて商品相互の市場が形成されるのであるから、市場の擴大は社會的分業の進展によること、第二に、商品經濟から資本主義經濟への轉化（↓小生産者の生産手段からの遊離）は、市場の縮少ではなくて擴張をもたらすことであつた。このように、レーニンは、市場をなにか特異な自立的なものとするナロードニキとは異つて、市場の形成を社會的分業の進展（勞働力商品化の契機をふくむ意味での、以下同じ）の過程に内在的・必然的なものとしてとらえる結果、いわば市場としての市場は問題でなくなり、市場をうみだす過程そのものの分析が正面に据えられることとなる。かくして、資本主義成立過程の分析の基礎視角が社會的分業↓市場の論理によつてあたえられるのであるが、社會的分業↓市場の視角からする資本主義成立の過程は、右に述べたように、必然的に、現物經濟↓商品經濟↓資本主義としてあらわれざるをえない。では、このような理論の歴史把握はいかなる性格をもつてあろうか。

まず、現實の歴史的發展に對するかかわり方において、市場理論表式の視點は、ブルジョワ社會の解剖學の視點

よりも、本質的に直接的・具體的である。ブルジョワ社會の解剖學は歴史的發展をそのまま時間的順序にしたがつて追跡するものではない。これに反して、市場理論表式では、資本主義の成立・發展が、歴史展開の時間的順序にしたがつて考察せられる。市場理論表式は、いわば、發生史的分析の視角をもつ理論である。ところが、それと同時に、市場形成理論による歴史把握は、資本主義の成立過程の分析の理論としても、抽象性をもつ。というのは、經濟的社會構成の交替としての資本主義の成立は、現物經濟→商品經濟→資本主義ではなくて、封建制→資本制であるから、市場形成理論は、封建社會の基本的生産關係を捨象して、資本主義の成立をいわば資本主義の側からのみみるわけである。だが、市場形成理論の抽象性は、地代範疇とか、強力の捨象とかいう點にかざられはしない。市場形成理論は、資本主義的諸關係の形成についても、社會的分業の進展というひとつの基本的な側面しかしめない。しかるに、現實の歴史過程においては、資本主義に固有な諸法則は、三階級分化の完了を待つてはじめて作用しはじめようなものではけつしてなく、資本の成立過程とともにすでに端緒的なあらわれをみせるであろう。市場形成理論は、資本の成立過程の分析において、それだけで自足的なものではなく、封建遺制の把握のみならず、資本主義的諸法則の作用の把握の面においても、『資本論』を前提し、それと結合してのみ現實分析を行うるのである。そして、このことは、レーニンの市場理論表式と再生産表式との關連を考へるうえで一つの樞點をなすと思われる。

レーニンが市場問題に關して、再生産表式の意義をいかに考へたかは、よく知られている。すなわち、レーニンは、再生産表式→實現の理論は「資本主義的生産の全般的、かつ排他的な支配」を前提するのにな、そのような前提はロシアの現實には妥當しないことを指摘して、資本成立→市場成立の過程を解明すべき表式として市場理論表式

を作成したのであつた。そこで、この點からみると、再生産表式は、資本の成立過程の分析にとつては完全に無縁なもののように見える。だが、果してそうであるうか。たしかに、再生産表式から資本の成立過程の市場問題に對するなんらかの解答をひきだそうなどとすることの誤りは、明白である。しかし、そのことは、再生産表式の前提する諸關係が資本成立の過程で漸時的に成立して来る以上、再生産表式のしめす法則性もまた、それに應じて漸時的に發現して行くことを否定するものではない。レーニンは、「發展」第一章の末尾にちかく、つぎのように記している。「國內市場は、商品經濟があらわれるときに現れる。……國內市場は、商品經濟が生産物から勞働力へうつるにしたがつて、ひろまつてゆく。そして、この勞働力が商品に轉化する度合に應じてのみ、資本主義は國の全生産をとらえ、主として資本主義社會でますます重要な地歩をしめてゆく生産手段の増大によつて發展してゆく」(全集第三卷四七頁、傍點筆者)と。周知のとおり、レーニンが市場についてマルクスの再生産表式を基礎として(かれ自身の作成した構成高度化表式によつて)あきらかにしたのは、資本主義のもとでは「生産手段のための生産手段の生産がもつとも急速に増大し、それによつて消費手段のための生産手段の生産が増大し、消費手段の生産はもつとも緩慢に増大する」(全集第一卷八三頁)こと、したがつて「國內市場の發展が主として生産手段の増大による」(全集第三卷三三頁)ことであつた。それゆえ、さきの引用文では、市場理論表式のしめす諸關係の進展(勞働力の商品化は市場理論表式の第四期ではじまる)とともに、再生産表式でしめされる諸關係・法則が漸時的に出現して行くことが指摘されていると考へてよいであらう。

では、理論としてはいつたんきびしく分離された市場理論表式と再生産表式とが、現實分析において結合されてくる媒介環はなにかといへば、それは、資本制的蓄積の法則である。なぜなら、一體、第二部門に對する第一部門

の優位的發展、(したがつて、資本主義のもとでは市場は主として生産手段の發展をめあてとしておこなわれること)そのものが、レーニン自身指摘しているように、個別諸資本が競争の壓力によつて命令されるところの生産手段の改善(『有機的構成の高度化』の結果であり、レーニンの構成高度化表式は、それを「社會的總生産に適用していいかえたものにすぎない」(全集第一卷八三頁)からである。すなわち、資本制的蓄積の諸法則が、資本の成立(社會的分業の一定の進展を前提とする勞働力の商品化)につれて作用しはじめることが、國內市場形成における生産手段のウエイトを増す根據なのである。

以上の行論によつて了解されるとおり、レーニンは、市場形成理論と再生産論(蓄積論を基底とする)との結合というかたち、あるいは、市場形成理論を媒介とする再生産論の適用という構えて、一八九〇年代ロシアの分析の基礎理論を準備したのであるが、外國市場の問題はそれに對してどのような關係にたつてあろうか。

レーニンは、ナロードニキが「剩餘價值實現の困難からの出口」として外國市場を考えるのに對して、再生産表式の本質を説明することによつてその誤謬をあきらかにしたが、レーニン自身も、外國市場が資本主義にとつて必要なことを認め、それを「歴史的性質」の原因から説明している。そして、この歴史的性質の原因というのは、再生産表式ではあらわされないかまたは方法的に捨象されるが資本主義そのものにとつては内在的・必然的な諸要因をさしている。たとえば、社會的生產の個々の部門間の素材的・價值的照應は、再生産表式では前提されねばならぬが、資本主義の現實においては生産の無政府性のためにたえず破られ、「より發展した産業は外國市場をもとめる」(全集第三卷四四頁)というように。だが、レーニンは、そのように、資本主義が國境を越える必然性を指摘するとともに、他方では、國內市場對外國市場という政治的國境にとらわれた傳統的區別ではなく、資本主義の内包

的發展（一定地域内における發展）と外延的發展（他の地域への發展）という經濟學的な視角にたたねばならぬことを主張する。ところで、このような視角にたつと、國內に資本主義の外延的發展の餘地がゆたかにあるばあいには、「外國市場」はかならずしも必要でないことがあきらかになる。やや先走りしていうならば、レーニンは、「發展」において、この視角からロシアの現實を把握し、東部および南部邊境地方が中央ヨーロッパ・ロシアの工業諸縣に對して「國內植民地」の役割を果していることを分析し、外國市場問題に完全な終止符をうつこととなる。このような見通しのもとに、「發展」の分析は、外國市場を捨象しておこなわれえたのである。すなわち、「大工業のための國內市場の形成過程」の分析として。

(1) 市場の形成を社會的分業からとらえることは、マルクスにはじまるわけでは勿論ない。すでにスミスがこの視點から農↓農・工↓農・工・外國貿易という市場發展の「自然的」コースを説いたことは周知の事實である（『國富論』第三編）。しかし、スミスは、小商品生産と資本主義との混亂をふくむために、生産者の生産手段からの解放が市場におよぼす作用をまつたくとりあげないのに對して、レーニンではこの點がむしる問題の中心である。第二に、スミスが社會的分業と私有財産制を不可分のものとしていっているに對して、マルクスを繼承するレーニンは、商品・市場を社會的分業一般の表現ではなく、私有財産と社會的分業を基礎とする社會の生産關係表現として認識している。以上二點は、ブルジョワ經濟學とプロレタリア經濟學の相違の市場形成理論におけるあらわれである。なお、社會的分業―市場は、それだけを孤立させてみれば、*市場*として市場形成をとらえるのであるから、そこから販路說に至る道をひらいているが、いうまでもなく、レーニンは市場形成の基本關係を簡明にしめすために貨幣を捨象したのである。

(2) 第二部門に對する第一部門の優位的發展について、レーニンは、技術的進歩の要因を捨象したマルクスの表式はそれを表現しないといひ、それを表現するために構成高度化表式を作成したのであるが、（全集第一卷八〇頁參照）その後の著作においては、マルクスの實現理論からただちにその結論がひきだされるようないい方をしていふ。（たとえば全集第三卷三〇―三三頁參照。）

厳密には、さきの方のレーニンの考え方によるべきである。

(3) 市場理論表式は、それ自體として、マルクス經濟學の微表をもつとはいへ(本節註(1)参照)、市場理論表式では、資本の發生はきわめてスムーズな過程としてあらわれ、資本の發生、發展とともに出現し、發展するところの、資本主義的矛盾は表現せられていない。だが、レーニンは、他方、實現理論に關して、恐慌がm部分のみならずcにもvにもかかわる「全機構震撼」であること、および生産の無制限的擴大の傾向と狹隘な消費の限界とのあいだの矛盾をあきらかにし、さらに、のちに述べるように、外國市場の問題に關して、實現理論では方法的に捨象されるが資本主義の現實においては無視しえない矛盾を指摘しており、それらとの連けいにおいて市場理論表式は讀みとらるべきである。

(4) 社會的分業—市場による市場把握(その集約的表現—市場理論表式)と實現理論(—再生産表式)における市場把握との視角および論理段階の差に注意すべきである。一體、社會的分業—市場の視角は、社會的生產の總體を構成する個々の生産者間の商品流通をえがくものであるのに對して、再生産表式は、社會的生產の個々の部門間の價值的および素材的適合を前提としたうえで、第I部門・第II部門の區別と、 $\frac{c}{v}$ 、 $\frac{m}{v}$ 、 $\frac{m}{c}$ を基礎として、社會的總資本の再生産と流通の法則を検出する。したがって、再生産表式においてあらわれる商品(資本家的商品、商品形態における資本)の流通は、たとえば第I部門のvプラスmと第II部門のcとの交換(貨幣流通を媒介とする)というように、集合的なかたちでつかまれるわけである。論理の段階からいえば、勿論、再生産表式は、社會的分業—市場よりもはるかに高次のものであり、社會的分業の進展によつて商品相互の市場が形成されるということは、再生産表式においては前提されている。再生産表式が、市場に關して示すことは、市場發展の契機ではなくて、資本主義に特有な市場發展の態様である。

四

市場理論の理論的性質の問題から、市場理論とロシア資本主義分析との具體的なかかわり方の問題にすすむための、すなわち、『發展』そのものの分析への、橋渡しとして、二、三の點を摘記しておこう。

さきにも述べたとおり、レーニンがナロードニキ批判をねらいとしつつ、「ロシア資本主義は發展する」ことを證明しようとしたとき、そのロシア資本主義は、帝國主義段階への推轉という世界的環境のなかで、しかも強力なツァーリズムの支配下にあり、土地制度にもまた封建制的遺制がのこされていた。このような、資本主義發展に對する逆條件を、レーニンはどのように科學的分析のなかでとりあつかつたか。そのさい市場理論はどのようなバートを占めたか。

(一) 帝國主義段階への移轉（『列強による植民地分割の一應の終了』の問題は、前節で述べた外國市場論において解決される。(二) レーニンは、ツァーリズムが事實上封建地代にはかならない諸掛りを農民に負擔させること等によつて、資本主義發展の速度をおくらせるていことを十分に認識しているが、上部構造は自然生的な社會發展の歩みをおしとどめないものとして、捨象される。(三) 下部構造のなかに残つた封建遺制とくに土地制度（分與地的土地所有）は、分析の對象となる。しかし、レーニンは、農業における資本主義の發展が土地制度のワクを越えて、あるいは、迂回して、行われつつあることを實證し、土地所有を基準としないで、經營を基準として、農民層の分解を確定する。この實證は、『いわゆる市場問題について』よりも前に書かれた『農民經濟における新しい經濟的動向』（一八九三年春執筆）において、行われており、市場理論表式はその實證と結ぶことによつて、具體的な意味をもつわけである。市場理論表式の重心は、「商品經濟から資本主義經濟への移行」（全集第一卷一〇五頁）にあるが、いますこし、くわしくいうと、一八九〇年代のロシアをあらわすのは、表式の第五期である。生産者の兩極分解は第四期からはじまるが、第五期では、プロレタリア化しつつある人々の手には、生計維持のために必要な量の半分の農業經營が残されているにすぎない。これは、「獨立の農業經營のみすばらしいなごり」（全集第一卷

九五頁)をとどめているロシアの貧農(『農村プロレタリアート』)の現状を表現する。表式は、第四期以降の推轉とくに今後行わるべき第五期から第六期への推轉が、市場にいかなる影響をおよぼすかの検出において、ロシア資本主義の將來への展望を興えるわけであつて、レーニンが表式を通してあきらかにしたことは、農民層分解が、工業のための國內市場を形成するということであつた。そして、これこそがすでに大工業を尖端にもつ都市の資本主義と、なお資本の完全支配以前にある農村との不均等發展という現實をみとめたりえて兩者をむすぶ現實分析の、基礎環をなすのである。

(1) ロシアにおいて、現實に資本主義化が進行しつつあることの實證において、樞點となつたのは、農民層分解と「クスターリ」の分析である。ナロードニキは、農民層を一括して中農的なもの(没落しつつある農民一般)として把握するのに對して、レーニンは、農民一般という把握の無概念性を摘出したのであるが、工業の面では、ナロードニキは、機械制大工業以外の一切を「クスターリ」―「人民的生産」として概括し、それを機械制大工業―資本主義に對立させていた。レーニンは「クスターリ」の分析によつて、それが實はさまざまな段階の、本質的にはすべて資本主義的なものであることを實證した。全集第二卷三四七頁以下「ペルミ縣における一八九四年―一九五年のクスターリ調査と「クスターリ」工業の諸問題」を參照。土地制度(分與地的土地所有)については全集第一卷十一頁以下を參照。

〔本稿は、一九五三年十二月民科京都支部經濟部會で、他の諸氏とともに行つた報告をもととしており、はじめ、他の諸氏の報告要旨と一括して發表する予定であつたところ、都合により、個別的に發表することとなつた。本稿は、續篇を豫定するものである。〕